CLC 交換留学報告書

愛媛大学大学院 人文社会科学研究科１年
渡航先：アメリカ (College of Lake County)

1. はじめに

本報告書では、2022 年８月~2023 年１月の一学期間、交換留学生として派遣させていただいた College of Lake County（以下 CLC）への留学を決意した過程、現地での学びと学外活動の様子を中心に報告いたします。また、今回の派遣にあたり愛媛大学より長期留学奨学金を頂いたことで、渡航先での学びをより充実したものにすることができました。ここに謹んで御礼申し上げます。

2. 留学の動機と目的

2.1 動機

アメリカでの学びに興味を持ったのはコロナ禍前の 2019 年、CLC と Joliet Junior College より留学生が愛媛大学に来日された際に、一緒に授業を受けたり生活を共にしたりすることで親交を深めたことです。さらに、その際に引率として来られていた先生の授業に興味を持ち、もう一度その先生の授業を受講したいと考えていたことが今回の交換留学と渡航先を決めた大きな理由です。また、大学院進学にあたり、研究対象である「翻訳過程」についての知識を深めることも動機のひとつでした。表面の言語的な部分だけでなく、その奥にある背景文化、テクストの機能、翻訳の目的、（翻訳されたテクストを読む）受容者等の要因が翻訳にどのような影響を与えるのかという問題に迫り、研究を進めていますが、そのうちの「ことばが使われる背景と意図」について理解を深めるためにも、交換留学という形態での留学を決意しました。

2.2 目的

今回の留学の大きな目的は、専門分野に関する知識の習得です。それに際し、一学期間という留学期間でできるだけアメリカ社会や言語文化についての知識を深めるため、留学生を対象とした ESL 科目ではなく現地の大学生とともに授業を受けることと、日本国内で培ったコミュニケーション能力と英語運用能力、そして専門分野に関する基礎知識を活かし、派遣校で現地学生と議論を深めることを目標として掲げました。また、予てより興味のあった人種やジェンダーに関する問題について、これらをアメリカ生活の中で学ぶだけでなく学問として学ぶ意義があると考え、今回の留学で履修することも目的としていました。

3. 留学中の様子

3.1 授業の内容

現地では TESOL（英語教授法に関する科目）、エッセイの体裁等を正しく学ぶための Writing/English Composition、新入留学生必修の American College Culture、人種・ジェンダーについてのクラス、そしてアメリカ社会を幅広く取り上げる社会学を履修し、計 13 単位を取得しました。特に人種、ジェンダーにおける差別は根強く残っており、授業で扱う内容も深刻なものが多く、目を背けたくなるような現実も目の当たりにしました。しかし、多様性の幅が大きいアメリカという地で生活をしながらこのようなトピックについて学ぶことは大いに意義があり、自分自身の考え方が変化するきっかけとなりました。授業のスタイルは議論や発表を通して進められるアクティブラーニング形式のものが主です。当初は周囲の学生たちに圧倒されましたが、徐々に慣れていき、学期の中盤からは自分の経験や課題として出された調査の内容に根拠を持たせながら意見を発表することができるようになりました。教授と周囲の生徒からコメントを頂いた際には達成感と自信を得られました。大変だったのは課題やテストの準備です。ほとんど毎回、授業前に読んでおかなければならない文献や教科書がある上に、毎週全ての授業から調査課題やエッセイ、リフレクション、ジャーナル等の課題が出されます。日本の大学で経験してきたよりもはるかに多くの量の課題に戸惑いましたが、後でこれはアメリカでは普通なのだと知りました。週によってはテスト勉強に追われ、週末まで時間がかかってしまうことも多くありました。留学生ということもあり、課題や勉強に費やす時間は恐らく周りのアメリカ人の生徒よりも 1.5~2 倍はかかってしまっていたと思います。大変苦労しましたが、同じ授業を受講していた友人と協力したり、教授やキャンパス内にある Tutoring Center 等のサポートを得たりしながら取り組みました。

3.2 授業外での様子

多忙な中でも時間を作って、放課後や金・土曜日には同じ留学生として仲良くなった友人やアメリカ人の友人と出かけることも多くありました。さらに、３年前に愛媛大学で出会った友人たちとも再会することができ、シカゴの街を案内してもらうなど、充実した日々を送りました。この点も交換留学の大きなメリットの一つだったと思います。

CLC では留学生を対象としたイベントが数多く用意されています。授業開始前には３日間のオリエンテーション、その後も教授のお宅へ招待していただいて親睦を深める Cook out、キャンパス内では International Education Week 期間内に自国のパネルディスカッションを行ったり、自前の料理を持ち寄って振る舞いあう Potluck などを行ったりしました。また、CLC に留学して最初の一学期間は先輩留学生が Peer Mentor として就いて授業内外のあらゆる困りごとをサポートする制度があり、さら

に Department of Global Engagement というオフィスには留学生がいつでも立ち寄ることができます。留学生にとってはサポートが充実している環境で、安心して過ごすことができました。

Cook out の様子

オリエンテーション

CLC, Grayslake キャンパス

3.3 留学を通して得た気づき・学び

まず一つ目が、勉強することを目的に、交換留学という形で滞在することができたことのありがたさです。同じ留学生の中には、母国の事情（紛争，クーデター，経済的・家庭的事情）で母国を離れてアメリカでの生活を余儀なくされている友人が複数いました。日本に生まれたことを羨ましく思われる、言われたことは一度だけではありません。このような出会いと、様々な話を聞くことは、これまで以上に国際問題に関心を持つことと、客観的・俯瞰的な視点から事象を見る力に繋がりました。さらに、「アメリカ」という国が移民・難民を受け入れることの意義と、その立ち位置についても深く考えるきっかけにもなりました。

二つ目は、前述の授業内容とも関わりますが、人種、肌の色、ジェンダーに関す

る差別は根強く、「差別をなくそう」、「多様性を受け入れよう」ということばで簡単に片付けられる問題ではないということです。日常生活のふとした場面でその格差社会を目の当たりにしたことも少なくなく、友人が実際にそうした差別の被害に遭ったという話も耳にしました。アメリカは「人種のサラダボウル」と言われますが、重要なのは、同じボウルに入っていても「ミックスジュースのように混ざっているわけではない」という点です。

しかし、考えたり気づいたりしたことはこのようなことばかりではありません。知り合いでなくても、その場に居合わせた人とすぐに打ち解けられたり、エレベーター、トイレ、お会計といった場所・場面で小さな会話を通して笑顔が生まれたりと、そのような人の温かさは何度も感じられました。また、世界各国から集まった留学生やアメリカ人の友人と会話を重ねるにつれて、「日本」という国が彼らからどう見えているのかを知ったことは、自分が日本人であることを誇りに思うことにも繋がりました。

4. おわりに

今回の交換留学で、渡航前に掲げていた目的と目標は達成することができたと感じています。また、最終的には教育学長から優秀学業成績を修めたことで Semester Honors を頂き、達成感を得られました。そして「ことばが使われる背景と意図」を理解することは、今回の交換留学期間全体を通して培われました。

一学期間という留学期間は、「生活をする」という視点では少し長く、「何かを学ぶ」という視点では少し短かったように感じています。授業においても、友人関係においても、「交換留学」という形態で留学する利点を十分に活用できました。帰国した現在は、今回の留学期間で経験したこと全てが私自身の人生のターニングポイントになったと実感しています。今後は、渡航期間中に得た知識と経験をもとに研究活動に励むとともに、私自身の就職活動・キャリア形成にも活かしていきたいと考えています。

以上、CLC 交換留学の報告といたします。